

## 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

## 【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 共同獣医学部・6年

氏名: 山中裕司

|   |                |
|---|----------------|
| 授業科目名   | 国際獣医学インターンシップA |
| <p>1. 研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。(250～300字程度)</p> <p>小動物の動物病院の診療に2週間参加した。診察はまず学生のみで問診および身体検査等を行い、その結果から疑われる疾患を考え、次に行う検査、治療法を検討し、先生へ報告するという形で行われていた。そのため学生自身で常に考え、同時にその症例に対する責任の意識が強いように思えた。先生はその報告を受け、学生に対して指導を行うため、コミュニケーションの機会が多いように感じた。学生が積極的に先生へ質問を行っていたため、自身の成長の為には積極性が重要であることを再認識した。また日本では目にする機会が少ないエキゾチックアニマルの診療や、レーザーを用いた治療などを見る貴重な機会となった。この経験を今後獣医師になった際に活かせるようにしたい。</p> <p>2. 現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。(250～300字程度)</p> <p>フランスの学生や先生は基本的に英語を話すことができる。海外の人とコミュニケーションを取るためには英語の習得は必須であると再認識した。診察に関しては全てフランス語であるため、フランスにて長期の留学、また生活するには英語に加えてフランス語を習得することでより有意義な実習および生活になると感じた。今回言葉が通じないことを多くあったが、思いや考えを伝える手段は言葉だけではなく、表情やジェスチャーといった部分も非常に重要な情報であると実感した。日本においても、自分が何かを伝える場合はその点を意識することで、人より良い関係を築くことができるのではないかと感じた。</p> <p>3. 研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。(250～300字程度)</p> <p>教えられる側である学生は自分で物事をよく考えて自立しており、先生や飼い主とのコミュニケーションを積極的に取ろうとする姿勢が強いと感じた。また教える立場である先生も学生の質問にはかなりの時間を割き丁寧に答え、獣医師を育てようという姿勢が強かった。私が学ぶ立場の時は、受け身ではなく積極的に知識を吸収しようという姿勢が大事であると感じた。また、私が教える立場になった際には、育成の為に丁寧に熱意をもって教えなければならないと再認識することとなった。また、今回はフランスの人と英語で会話する機会があったが、所々会話に詰まってしまう時があった。海外でコミュニケーションを取るためにも語学の勉強を継続して行わなければならないと痛感した。</p> <p>4. 地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。(250～300字程度)</p> <p>私は小動物の臨床獣医師として社会に貢献したいと考えている。診療においてはただ動物を診断して治療するという単純なものではなく、動物や飼い主との信頼を築き、動物と飼い主がよりよい生活を送るための手助けを行わなければならないと考える。コミュニケーションをとり、常に寄り添えるようにしなければならないと感じた。また、獣医療は知識を習得したら終わりではなく、変化、進歩する分野であるため、常に研鑽することを欠かさず、自分自身を高めていけるように高い志をもって獣医師としての責務を果たしていかななければならないと強く感じた。自分自身を成長のためには積極的に海外交流を図り、新たな知識や思考、文化を取り入れていくことはとても重要であると再認識した。</p> |                |

## 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

## 【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 共同獣医学部・5年

氏名: 高倉翼

|   |               |
|---|---------------|
| 授業科目名   | 国際獣医学インターシップA |
| 1. 研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。(250~300字程度)   |               |
| <p>Alfort大学付属の動物病院(CHUVA)にて主に小動物の一般診療と外科診療の実習にそれぞれ1週間現地の学生と共に参加した。実習は問診から身体検査、教授とのコンサルティング、検査、診断まで一連の流れを1日かけて行う。症例ごとに1人ないし2人で担当する。特に一般診療では来た症例に対しどんな検査が必要か、考える鑑別疾患は何か学生が自分で考え教授に提案する。1つの症例を追って思考できる実習内容となっているため、臨床実習としてかなりの学習効果が得られる。動物病院には多種の診療科が設置されており、画像診断科や皮膚科、外科手術、エキゾチックアニマルの診療実習にも参加した。</p> |               |
| 2. 現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。(250~300字程度)   |               |
| <p>実習では診療を組み立てることの難しさを一番感じた。飼い主から必要な情報を聞き出し、そこから想定される必要な検査を提案し、治療のプランを提示する。教科書通りでない事や複雑なケースもあり、これまで学習して得た知識だけでは不十分でありそれらを実際の診療に応用させなければならない。臨床の現場に非常に近い実習であった。また現地の学生と議論することで論理的に伝える力を養い、知識を補充する事ができた。それに加え外国語を使うため、伝わらない事へのフラストレーションや国際的に必要な語学力のレベルを認識する事ができた。</p>                                 |               |
| 3. 研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。(250~300字程度)   |               |
| <p>Alfort大学は実習が学生主体である。問診や検査によって得た情報を教授に説明し問題点を挙げる。教授から質問されることも多くあり、飼い主のいる診察室で議論が始まる。例えば、高Ca血症の犬の症例で想定される疾患を考える。加えてこの犬は炎症マーカーの数値も高い症例だ。現地の学生は自分の意見をしっかりと伝えていた。わからなければその場で授業が始まる。飼い主の目の前であるため当然不確かなことは言えない。日本では味わえないような緊張感の中実習した。ここで学んだ知識は深く記憶に刻まれ、これらの経験は自身の勉学への責任を認識しモチベーションとなった。</p>              |               |
| 4. 地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。(250~300字程度)   |               |
| <p>今回で感じた1番の課題は語学力の足りなさである。事前にある程度は準備していったが、円滑なコミュニケーションを取るにはまだ足りないと思った。現地の生活で自国の文化と異なる事で困ったことも多い。そんな時に語学力があれば現地の人に聞いて問題を解決できる。楽しいこと悲しいこと今の感情をそのまま伝えられるようになればより良い経験ができるはずだ。また、私は初めての海外で不安も大きかったが非常に有意義で充実した留学となった。この経験をもとに、留学してみたいけど勇気が出ない後輩たちにアドバイスしていきたい。</p>                                     |               |

## 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

## 【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 共同獣医学部・5年

氏名: 江崎赳夫

|   |                |
|---|----------------|
| 授業科目名   | 国際獣医学インターンシップA |
| 1. 研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。(250～300字程度)   |                |
| <p>研修は現地のアルフォー獣医大学内に設置してある動物病院で行った。実習は主に犬・猫の一般内科と一般外科の診察に参加した。具体的な内容としては現地の学生と共に飼い主に問診、身体検査を実施し、その後、それを踏まえて飼い主の前で獣医師に問診で得た情報を伝え、次にどのような検査をすればよいのかを獣医師に提案し、検査を進めていき、病因を明らかにしていくというものである。ここでは基本的に最初の問診と身体検査は学生だけで行っており、その後の検査すべき内容まで学生が考えている。そのため、今回の実習を通して学生のうちから、自分自身で病因についてより深く考え、動物に対する責任感をより持つべきだと思った。</p>   |                |
| 2. 現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。(250～300字程度)   |                |
| <p>フランスでは獣医師の地位は医者などよりも上の地位にあると聞き、学生の獣医療に対する学びの意欲が高いと感じた。これは、飼い主の素朴な疑問とかも適切に回答することができる学生の知識量、適切な身体検査を学生だけで行っていると感じた。ただ、学生は週に2回、夜にお酒を飲んだり、食事をしたりするイベントを行っており、オンとオフを切り替えがしっかりしており、ワークバランスも保っているのだと感じた。</p> <p>フランスには4つの獣医大学しかなく、今回の自分が研修を行った大学も敷地面積は日本の大学と同じぐらいにも関わらず、獣医のためだけの建物しかなく、獣医学への教育の力が入っているのだと深く感じた。</p> |                |
| 3. 研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。(250～300字程度)   |                |
| <p>犬、猫のエコー検査やX線検査をする際にフランスでは鎮静や麻酔をかけ、一つ一つの診察に時間をかけて、疑われる臓器やその周辺だけではなく、全体を見て確定診断を行っていた。日本では動物にあまり負担をかけないためにエコー検査やX線検査などの検査では麻酔はあまり用いないが、フランスでは時間をかけて各臓器を見ていくことで原因を究明するという意識が感じられた。この経験を通して、今後、自分自身が小動物臨床医として働く上で、一頭一頭に鎮静をかけて検査することは困難ではあるが、一つ一つの検査に対して、病変が疑われる臓器だけでなく、スクリーニング検査していくことが大事であると感じた。</p>             |                |
| 4. 地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。(250～300字程度)   |                |
| <p>今回の研修を通して、獣医療の最先端であるフランスの知識を得ただけではなく、精神面でも成長することができたと思う。自分はまだ学生期間が1年間残っているため、より積極的に実習に取り組み、得られる知識や経験を十分に蓄えたいと社会に出ていきたいと思う。今後もなにかしらにチャレンジする機会があったら、そのような機会を逃すことなく積極的にチャレンジしていきたいと思う。今回得られた経験をより多くの人と共有することで地域社会の発展に貢献できていくのではないかと考える。また、後輩とも共有していくことで後輩の成長にもつなげていきたいと思う。</p>                                  |                |